

## 「宗教を考える学校」について

連日、自民党と世界平和統一家庭連合（旧世界基督教統一神霊協会＝旧通称・統一教会）との関係が報道されている。テレビでも新聞でもインターネット記事でも。あふれかえるほど。

それらのいくつかに目を通しながら、次のような疑問と懸念が消えない。

- 1, なぜ警察も大手報道各社も、参議院選挙まで後2日の段階で起こった安部晋三元首相殺害事件の容疑者について明確な発表や報道をしなかったのか？ 特に、大手メディアは、山上徹也容疑者についての一定の情報を得ていたと推測されるが、そのことを報道しなかったのはなぜなのか？（選挙後の過熱した過剰とも言えるほどの報道を見ていると、いっそうそのアンバランスに疑念が沸いてくる）選挙前にこの事件についての背景や安部元首相と旧統一教会との関係が一定程度はっきりと報道されていたとしたら、選挙結果はどうなっただろうか？
- 2, 1995年の阪神大震災後に起こったいわゆる「オウム真理教事件」後、「宗教（教団）不信」や「宗教全般への警戒心」が異常に強くなったが、今事件後も、日本社会において、再度ないし再再度か、「宗教（教団）不信」や「宗教全般および宗教教団への誤解や決めつけや警戒心」が強くなっていくのではないかと心配している。

この2つのうち、2の懸念に関係する新聞記事を読んだ。

毎日新聞2022年8月12日付け記事には<sup>(1)</sup>、カルトからの脱会支援活動をしている京都在住の浄土真宗の僧侶が、「靈感商法」や献金の強要や政治家との関わりは批判し検証されるべきであるが、信者個人の人格や旧統一教会以外の新宗教もまとめて批判したり否定するような言説に対しては「危うさ」を感じていることを表明している。同感である。また、本日、8月20日付けの朝日新聞記事では、自民党と旧統一教会との「支援」の関係が生々しく報じられている<sup>(2)</sup>。

一般によく知られているように、日本の社会は同調圧力が強く、もともと「右にならえ」の傾向がある。

だからこそ、1の報道に対しても自制・自粛・抑制・同調圧力がはたらいたのではないかという疑念が消えないのだが、こうした場合に、冷静に「宗教」と「宗教の歴史」と「各宗教教団」の活動などを、ある面では切り離して、ある面では結び付けて、冷静に考察し、議論し、それぞれが自由に考え、判断できる環境を作る必要があるのではないかと思う。

そこで、振り返っておきたいのが、1996年の1年間、月1回開催した「宗教を考える学校」のことである。この「宗教を考える学校」は、負債で苦しむ奈良県吉野郡天川村坪ノ内鎮座の天河大辨財天社を支援する「天河曼陀羅」の「Vol,7」の企画として行なった1年間の講座である。

結局、これが「天河曼陀羅」の最後の企画の催しとなった。それを開催している途中やその後から、私は猿田彦神社の「おひらき祭り」（1996年以降）や「天河護摩壇野焼き講」（1997年2月3日以降毎年開催）や「神戸からの祈り」「東京おひらき祭り」（1998年）に関わり、それがひと段落ついて、「東京自由大学」の設立（1998年5月5日設立趣意書執筆、1999年2月20日設立シンポジウム「ゼロから始まる芸術と未来社会」開催）に参加していったのだった<sup>(3)</sup>。

今、振り返っても、「宗教を考える学校」は興味深い講師が揃っていたと思う。当時私たちのできる最良の人選だった。開催趣旨文と講座の概要は以下の通りである。

## A. 趣旨

二十世紀末を迎えて、世界はいよいよ混迷の相を深くしている。その混迷の根っこには、資本主義・社会主義を問わず、近現代の産業文明の抱える構造的な問題（自然と人間と文明の相克的構造）があり、それに加えて、宗教と民族・人種の問題が大きく横たわっている。これらの問題は複雑にして巨大で入り組んでいる。しかしこれへの解決なしに二十一世紀の未来はない。

「天河曼陀羅」では、一貫して固定化し権力化した宗教や宗教的思考に対して批判的意識を向け、「超宗教への水路」を追求してきたが、この道もまたけって生やさしいものではなく、さまざまな歴史的屈折や困難を抱えている。宗教を超えるとは、宗教性の根底に降りてゆくことであり、そこで宗教性を支える霊性の岩盤に向き合うことであると私たちは考えているが、そうした「超宗教への水路」をより確かなものにするためにも、宗教に対して研究的にも実践的にも深くかかわってきた講師を迎えて、一年かけてじっくりと宗教にまつわる諸問題に取り組んでみたい。そして、宗教と文明の未来に向けての探究と供え（備え）を始めたい。

ただし、各講師はそれぞれ独自の視点とアプローチを持っており、必ずしも「天河曼陀羅」の根本姿勢と同調するものではない。むしろ、異質な視点や他者性に対する開かれを通してこそ「超宗教への水路」をより明確に自己意識化し、相対化しつつ、その可能性を掘り下げることができると考える。なお、この講座は、私たちの探究と学びの姿勢をはっきりさせるために「学校」という呼称をあえて用い、各講師には事情の許す限り、自分の講座以外の講座にも出席・参加していただき、共に学び共に考え共に探究していきたいと思っている。基本的には、たとえ立場も思想も異なっていたとしても、講師も受講者も共に学びの徒であると認識している。

## B. 講師・テーマ・年間スケジュール

- 1月20日 鎌田東二（武蔵丘短期大学助教授）「今、なぜ、“宗教を考える学校”をつくるのか—宗教・霊性・意識の未来」
- 2月10日 柿坂神酒之祐（天河大辨財天社宮司）「超宗教と神道と天河の精神—宗教意識は変化しているか？」
- 3月16日 島藺進（東京大学教授）「宗教と社会—新宗教および新霊性運動の輪郭と問題点」
- 4月13日 斎藤文一（新潟大学名誉教授）「宮沢賢治における宗教・芸術・科学」 【故人】
- 5月18日 荒木美智雄（筑波大学教授）「宗教と宗教学—宗教学の成立と展開と現代の宗教状況」&総括ディスカッションⅠ 【故人】
- 6月15日 玉城康四郎（東京大学名誉教授）「宗教体験の本質と全人格的思惟」 【故人】
- 7月20日 深澤英隆（一橋大学助教授）「神秘主義の諸問題とイロニー—宗教的形而上学批判」
- 8月10日 戸田日晨（日蓮宗大荒行堂遠壽院傳師・住職）「宗教と修行—修行者がぶつかる諸問題」  
ま北きこり（富士講社ま北再興者・前プラサード書店店主）「富士講の新たな再生に向けて」&総括ディスカッションⅡ
- 9月14日 津村喬（関西気功協会代表）「ホリスティック宗教と気の世界観」 【故人】
- 10月19日 梅原伸太郎（本山人間科学大学院講師・日本礼楽研究センター所長）「宗教と他界観—霊学とスピリチュアリズムの観点から」 【故人】
- 11月16日 中村桂子（生命誌研究館前館長・早稲田大学教授）「生きることの驚きと謎」
- 12月14日 横尾龍彦（画家）「宗教体験と芸術体験」&総括ディスカッションⅢ 【故人】

天河曼陀羅 Vol.7 「宗教を考える学校」 1996年

A. 趣旨

二十世紀末を迎えて、世界はいよいよ混沌の相を深くしている。その混沌の根っこには、資本主義・社会主義を問わず、近現代の産業文明の抱える構造的な問題（自然と人間と文明の相克的構造）があり、それに加えて、宗教と民族・人種の問題が大きく横たわっている。これらの問題は複雑にして巨大で入り組んでいる。しかしこれへの解決なしに二十一世紀の未来はない。

「天河曼陀羅」では、一貫して固定化し権力化した宗教や宗教的思考に対して批判的意識を向け、「超宗教への水路」を追求してきたが、この道もまたかつて生々しいものではなく、さまざまな歴史的曲折や困難を抱えている。宗教を超えとは、宗教性の根底に降りてゆくことであり、そこで宗教性を支える霊性の岩盤に向き合うことであると私たちは考えているが、そうした「超宗教への水路」をより確かなものとするためにも、宗教に対して研究的にも実践的にも深くかかわってきた講師を迎えて、一年かけてじっくりと宗教にまつわる諸問題に取り組んでみたい。そして、宗教と文明の未来に向けての探究と供え（備え）を始めたい。

ただし、各講師はそれぞれ独自の視点とアプローチを持っており、必ずしも「天河曼陀羅」の根本姿勢と同調するものではない。むしろ、異なる視点や他者性に対する開かれを通してこそ「超宗教の水路」をより明確に自己意識化し、相対化しつつ、その可能性を掘り下げることができると考える。なお、この講座は私たちの探究と学びの姿勢をはっきりさせるために「学校」という呼称をあえて用い、各講師には事情の許す限り、自分の講座以外の講座にも出席・参加していただき、共に学び共に考え共に探究していきたいと思っている。基本的には、たとえ立場も思想も異なっていたとしても、講師も受講者も共に学びの徒であると認識している。

B. 講師・テーマ・年間スケジュール

- ① 1月20日(土) 鎌田東二 (武蔵丘短期大学助教授、宗教哲学・神道学)  
18:00~20:30 「今、なぜ“宗教を考える学校”をつくるのか——宗教・霊性・意識の未来」(準備会:この日のみ入場無料)
- ② 2月10日(土) 柿坂神酒之祐 (天河大佛財天社司宮)  
18:00~20:30 「超宗教と神道と天河の精神——宗教意識は変化しているか？」
- ③ 3月16日(土) 島田 進 (東京大学教授、宗教学)  
18:00~20:30 「宗教と社会——新宗教および新霊性運動の輪郭と問題点」
- ④ 4月13日(土) 斎藤文一 (新潟大学名誉教授、高層物理学)  
18:00~20:30 「宮沢賢治における宗教・芸術・科学」
- ⑤ 5月18日(土) 荒木美智雄 (筑波大学教授、宗教学)  
18:00~21:00 「宗教と宗教学——宗教学の成立と展開と現代の宗教状況」  
& 総括ディスカッションⅠ(5/18) 司会:鎌田東二
- ⑥ 6月15日(土) 玉城廣四郎 (元東京大学教授、仏教学)  
18:00~20:30 「宗教体験の本質と全人格的思維」
- ⑦ 7月20日(土) 深澤英隆 (一橋大学助教授、宗教学)  
18:00~20:30 「神秘主義の諸問題とイロニー——宗教的形而上学批判」
- ⑧ 8月10日(土) A戸田善育 (日蓮宗大荒行堂遠善院住職・住職)  
18:00~21:00 「宗教と修行——修行者がぶつかる諸問題」

□ 東北きこり (富士講社北再興者・前ブラサード書店店主)  
「富士講の新たな再生に向けて」  
& 総括ディスカッションⅡ(8/10) 司会:鎌田東二

- ⑨ 9月14日(土) 津村 喬 (関西気功協会代表、評論家)  
18:00~20:30 「ホリスティック宗教と気の世界観」
- ⑩ 10月19日(土) 梅原伸太郎 (本山人間科学大学院講師・日本霊学研究会センター所長)  
18:00~20:30 「宗教と他界観——霊学とスピリチュアリズムの観点から」
- ⑪ 11月16日(土) 中村桂子 (生命誌研究館副館長、早稲田大学教授、生命誌)  
18:00~20:30 「生きることの驚きと謎」
- ⑫ 12月14日(土) 横尾龍彦 (画家) 「宗教体験と芸術体験」  
18:00~21:00 & 総括ディスカッションⅢ(12/14) 司会:鎌田東二

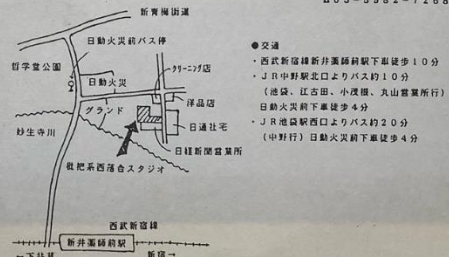
C. 場所 批把系西落合スタジオ ◇西武新宿線 新井薬師前駅下車 徒歩10分◇  
(新宿区西落合2-9-10 ☎03-5982-7268)

D. 費用  全回通し(年間授業料) 20,000円   
 一回限り 2,000円   
原則として、年間通し参加者を募集します。なお、終会後、そのまますたジオにて飲食を共にしながら懇談会を行います。【参加費 1,000円】

E. 付記 ~修学旅行計画について~  
講座とは別に、現地野外実習を計画しています。たとえば、2月2・3日天河大佛財天社の鬼の宿・節分祭、5月金峰山・瑞がき山(山梨県)登拝、7月16・17日天河大佛財天社何大祭参拝、8月出羽三山(山形県)登拝などを考えております。

F. 問い合わせ先 天河曼陀羅事務局(鳥飼 ☎0422-36-1503)

G. 地図 批把系西落合スタジオ 〒161 新宿区西落合2-9-10 ☎03-5982-7268



この時、関わってくれた13人の講師の内、約半数の6名が故人となった。そこで問われたことを再度思い起こしつつ、「宗教を考える学校」第2弾が一般社団法人宗教信仰復興会議とNPO法人東京自由大学との共催で出来ないものかと考えている。宗教研究者、宗教者、ジャーナリスト、弁護士、政治家、経済学者などなどの専門家を迎えて、自由に議論し、考えていく場の形成。

今回の事件を通して、もう1度「宗教を考える学校」のような集いと機会が必要だと強く思うものである。(2022年8月20日記)

注

- (1) 毎日新聞 2022年8月12日付け記事には、<安倍晋三元首相が銃撃され死亡した事件をきっかけに、報道やインターネットでは「世界平和統一家庭連合(旧統一教会)」への批判があふれている。逮捕された山上徹也容疑者(41)が動機として安倍氏と教団との関わりを挙げたとされるためだ。「靈感商法」や献金の強要などの問題や政治家との関わりは批判、検証されるべきだが、信者個人の人格や、旧統一教会以外の新宗教もまとめて否定するような言説も見られる。「危うさを感じます」。カルトからの脱会支援活動を続けている真宗大谷派の僧侶、瓜生崇さん(48)はそんな懸念を口にしている。「長期的に見て、良い方向には進んでいない」。どうということか、話を聞かせてもらった。

・「正しさ」に苦しむ現役信者

「旧統一教会の信者はいま、すごく苦しんでいるはずですよ」。知人に現役信者が何人かいるという瓜生さんは、複雑な心境を明かす。「旧統一教会が無理な献金の要求など社会的な問題を起こしてきたのは間違いなく、政治との関わりも含めきちんと批判すべきです」。信仰の核心部分を隠し詐欺的な勧誘をしてきたことも、カルトの重大な特徴として問題視する。ただ、信者にも層があり、こうした被害に遭わずに地道に信仰活動を続ける人もいると指摘する。「一斉にバッシングを浴び、信仰そのものが悪であるように言われることはつらいと思います」（以下省略）と掲載されている。

(2) 朝日新聞 2022年8月22日付け朝刊記事<教団側支援 陣営「外で言うな」自民前議員ら旧統一教会側との関係証言

<2016年の参院選で「世界平和統一家庭連合（旧統一教会）」の友好団体から支援を受けた自民党の前参院議員の宮島喜文氏（71）が朝日新聞の取材に応じ、その経緯や支援の実態を語った。今夏の参院選前にかわした安倍晋三元首相とのやりとりの内容も証言した。そこから浮かぶのは、選挙を通じた自民と教団側との深い結びつきだ。

・16年参院選

安部氏の銃撃事件後、宮島氏は複数回取材に応じた。宮島氏陣営の複数の幹部らも別に取材に応じた。

宮島氏は、12年から日本臨床衛生検査技師会（日臨技、東京都）の会長を務め、16年の参院選で初当選。改選を迎えた今夏の参院選では教団側からの支持が得られなかったことなどを理由に、すでに得ていた党の公認を辞退して立候補を取りやめた。

16年参院選への立候補は、伊達忠一・元参院議長（83）から「選挙の1年ほど前に打診を受けた」。伊達氏は臨床検査技師出身で、当時の役職は参院幹事長。派閥は清和会（現安部派）に所属していた。

宮島氏の陣営は当時、日臨技の政治団体とほかの関係団体などで、計10万票を得たいと思っていた。自民が比例で18議席を得た13年の参院選では、自民候補の当選ラインは7万7千票、12議席だった10年は10万票だった。この10年参院選では、12番目に滑り込んだのが臨床検査技師出身の候補だった。

・「もう引けない」陣営幹部進言

「正直、当選できる自信はなかった」。宮島氏はそう振り返る。当選を確かなものにするために、さらなる上積みが必要だった。そこで加わったのが、教団側からの支援だったという。

宮島氏は公示の直前に伊達氏から「党の支援団体の票をもらってきたと言われた」。団体名は「世界平和連合」と聞いた。陣営幹部から旧統一教会と関係があると教えられ、戸惑ったという。平和連合は教団の友好団体。陣営幹部は宮島氏に「上がつけてくれた団体ですから、もうあとには引けません」と進言した。

宮島氏は伊達氏の指示で都内の関連施設で平和連合幹部にあいさつしたという。宮島氏らは「教団側の支援が公になると危うい」と考え、「一部の陣営幹部のみが知るトップシークレット」と位置づけた。宮島氏は陣営幹部から「外でおおっぴらに言っちゃいけません」と忠告された。

宮島氏自身は、選挙で平和連合と直接やりとりすることはほとんどなかった。陣営幹部と平和連合の担当者が窓口となり、公示直前に国会近くのホテルで選挙協力について協議した。（以下省略、一面トップ記事）

(3) 1992年から始まった「天河曼陀羅」の活動については、鎌田東二・津村喬編『天川曼陀羅—超宗教への水路』（春秋社、1994年7月刊）、猿田彦神社の「おひらき祭り」については、鎌田東二編『謎のサ

ルタヒコ』(創元社、1997年10月刊)、「神戸からの祈り」については、鎌田東二・喜納昌吉『靈性のネットワーク』(青弓社、1999年9月刊)、NPO法人東京自由大学については、鎌田東二『世直しの思想』(春秋社、2016年2月刊)第五章を参照されたい。